

# 入江一子自選展

百寿記念

独立美術協会会員、女流画家協会創立会員としてシルクロードの連作を描き続ける洋画家・入江一子の百寿記念の自選展が開かれる。画業の歩みを土方明司氏に寄稿頂いた。

## 百寿記念 入江一子自選展に寄せて 土方明司

入江さんをシルクロードへといさな、画家としての生涯をかけるシルクロード連作を生むことになった。

女子美術専門学校卒業の年、当時非常な厳選であった、

入江さんはシルクロードへといさな、画家としての生涯をかけるシルクロード連作を生むことになった。女子美術専門学校卒業の年、当時非常な厳選であった、

独立美術協会展に入選。その後林武に師事する。この林武との出会いは入江さんに多大な影響を与えた。「絵の鬼」とまで呼ばれた林武から、技術面はもとより絵画の精神を叩き込まれた。それは、「絵に自分の魂を込め、画面の中から「人を引っ張る力」を描く。そのためには「納得のいくまで描いては消し」、「建設と破壊」を繰り返す」ということ。入江さんは約40年にわたり林武の教えを忠実に守り、画家としての目と手を鍛えたこと、絵の基礎を磐石なものにしている。いまある入江を築いた。画風の大きな転機となるのが、69年の台湾旅行である。現地の廟に見られる原色の装飾が、彼女の内部に眠る本来のカラーリストとして



「雲南ジンボー族まつりの日」2015年 181.8×259.1cm



「ジーエルフナー広場（マラケシュ）」1978年 193.9×259.1cm

の色彩感覚を強く刺激した。特に78年、北京、大同、敦煌などを訪問したことは、入江さんにシルクロードの連作を続けるための強い刺激となった。入江さん62歳の時である。

シルクロードに開眼したところによって、入江さんの画風は大きく変わった。生まれ育った韓国の大陸的な空間と原色の色彩は、入江さんの目の原点となっている。日本に戻り、日本の風土に長く親しむことによって、大陸の空間と色彩を改めて新鮮な視点でとらえ直すことが可能となった。加えて、林武の厳しい指導によって、画家としての目と手を鍛えたこと、絵の基礎を磐石なものにしている。いまある入江を築いた。画風の大きな転機となるのが、69年の台湾旅行である。現地の廟に見られる原色の装飾が、彼女の内部に眠る本来のカラーリストとして

百寿を迎える入江一子さんの自選展が三越で開催される。入江さんは韓国・大邱（テグ）に生まれた。女学校時代、早くも難関の朝鮮美術展に入選するなど周囲からその画才が注目された。画家になることを決意した入江さんは、単身日本で学ぶことを決意する。この大陸的な視点の後に、

し、女子美術専門学校に入学。1934年、18歳のときである。初めてみる日本の風土は、緑豊かな。しかし「箱庭的」なものとして彼女の目に映った。この時すでに、大陸的でスケールの大きな視点が画家の内部に根差していたのである。

10月26日(水)〜11月1日(火) 日本橋三越本店 本館6階 美術特選画廊(東京都中央区日本橋室町1-4-1) 03-3241-3311 困無休 無料観覧10時30分〜19時30分 (最終日は17時閉場)

◎日野原重明先生とのキャラクタートーク 10月26日(水)14時〜 10月21日(水)〜27日(火) 名古屋栄三越7階 特選画廊